



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

40

林 房 雄
武田麟太郎
島 本 健 作

中央公論社

林 房 雄
武田麟太郎
島 木 健 作

昭和 43 年 7 月 25 日初版印刷

昭和 43 年 8 月 5 日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋 2 丁目 1 番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

林 房雄

青年

武田麟太郎

日本三文才ペラ

市井事

勘 定

大凶の籤

島木健作

瀬

335

317

295

277

59

盲 目	371					
第一義の道	399					
黒 猫	436					
赤 蛙	443					
注 解	451	三 島 由 紀 夫				
解 説	460					
年 譜	471					
口 絵		吉 岡 堅 二				
挿 画		吉 岡 堅 二				
		「青 年」				
		「日本三文オペラ」「市井事 勘定」「大凶の籤」				
		「癩」「盲目」「第一義の道」				
		「赤蛙」				
		中 野 淳				
		中 野 淳				

林
房
雄

青年

第一章

若かったので、そして希望にみちていたので、彼はどんな外的事情の組合せによっても、心を挫かれることを拒んだ——そうだ、「運命」そのものによつてさえも。

*オノレ・ド・バルザック

元治元年。夏。七月のある日の午後、二人のポルトガル人がイギリス公使館の若い通訳官アーネスト・サトウに案内されて、横浜弁天町の旅宿芝屋初五郎の店先きにやつてきた。帳場の主人はひどく驚かされた——二人のポルトガル青年があまりに日本人に似すぎていたので。

元治元年は西暦一八六四年であり、ペリ来航の日からすでに十年経っている。横浜が開港場になつてからも、もう七年目だ。横浜村はこの七年間に、はじめした沼

地の上の腐れかかった漁村から、街を歩いて外国人にあわぬことのない国際都市に成長した。その発展を眼のあたりに見てきた芝屋初五郎であるから、別に異人は珍しくなく、その一人や二人が黄色い皮膚をしていたからといって、今さら驚かぬ。異人の中には黒い奴さえいる。つい二、三カ月前、フランスの軍艦が上海から積みこんできた二百五十人のアフリカ兵などは、どれもこれも黒光りだ。顔にしても、まるで牙彫の根付のように白い歯をむきだしている。

ポルトガル人が眼も黒く髪も黒く、低い背丈から皮膚の色まで、日本人によく似ていることも、初五郎は知っていた。浮気な外人たちは横浜花街の女にスペイン名前やポルトガル名前をつけて喜んでゐるほどである。だが、それにしても、この二人のポルトガル青年はあまり日本人に似すぎている！

青年は、二人とも、縫いのたしかな黒のスーツをつけていた。夏であるにもかかわらず正しく結んだ胸飾りも、たまに洋服を着る支那人の両替屋たちのそののように、半分裏がえしになつて襟からとびだしているようなことはなかった。髪は日本の総髪に似たなでつけ髪だが、櫛目正しく分けてあり、そのおとなしいヨーロッパ風は疑うべき節もなかった。——だが、黒い帽子と襟の間からじつとこつちを見つめているあの顔は！

年上の方は、もう三十に遠くなからう。四角な顎と切れの長い眼と釣りあがつた眉、はげしい気性を示して顔に浮き上っている青い静脈。年下の方は二十歳をすぎて間もあるまい。やや丸顔で、赤い頬、特色は鳥羽絵に描いたら小さな二つの点であらわせる白眼のかった眼、それが青年らしくきらきら輝いているので、鋭く尖つて、金壺眼と悪口をいわれる型に近づいている。——しかし、こうして顔の要素を拾いあげてゆくことは、初五郎の胸を刺してびくりとさせたあるものを説明することにはならぬ。初五郎はただ感じた。犬が犬を感じ、猫が猫を感じるように、この二人のポルトガル青年の中に動かすことのできぬ日本人を感じたのだ。

アーネスト・サトウは、二人の国籍と香港から商用のために来たという旅行の目的とを手みじかに説明したあとで、やや調子のとれた日本語で言った。

「部屋はありますか」

「部屋と申しますと？　へい」

土間において卑屈なもみ手をしながらも、初五郎はもの慣れた宿屋の亭主らしく、旅客の鑑定についての頑固な自信を眼の色に現わして、通訳官の顔を見かえした。しかし、相手はひるまなかつた。

「この二人の紳士が、泊りたいのです」

「ああ、それは——なるほど」

言葉がみつからないので、初五郎は頭をかいてみせた。なにかしら腹立たしい気持で青年の方をじろりと見た。すると青年たちの顔が明らかにあわてだした。

それみたことか！　しかし、どうしたわけか、推測が的中したときの勝利感湧いてこなかった。いよいよ日本人だ、と思うと、説明のつかぬ恐怖で心が縮んだ。

「どうも、おあいにくさまで、その……」

「部屋はありませんか？」

植民地の外人に共通する自信にみちた尊大さで、サトウはたたみかけた。攘夷騒ぎのために、諸国の商人も出足をひかえているはず、部屋があいていないとは言わせぬぞ、と彼の言葉の調子は明らかにそう言っていた。

「それが、あの……」

初五郎の菱形の顔はますます菱形になり、眉がさがって情けない顔つきになった。

「どうかしりましたか？」

どうかしましたかもないもんだ、こんな化物みたいな客をひっぱって来やがって！　腹立たしさと恐ろしさ、組合せのむずかしい二つの感情が二匹の章魚のように血管の中をあれまわるので、初五郎の哀れな両肩は小山のようにとびあがり、はるかな谷間で、油で光る小さな蠟が救助信号のようにびよこびよこと動いた。

若い方の青年が神経的に帽子をかぶりなおし、サトウ



に近づいて早口な英語でなにか言った。初五郎は気がつかなかったが、彼らはさっきから初五郎以上に落着きを失っていた。年上の方は気早な逃げ足をもう出口の方にむけていた。

サトウは頬髯^{ほあひげ}のはえかけた若い顔に、いたずらそうな薄笑いをうかべて、待ちたまえという意味の右手を二人の方にあげたまま、くるりと初五郎の方に向きかえった。哀れな商人のひらきかけた心が、ぶすりと音をたててまたしぼんだ。

「どうしても部屋はありませんか？」

「ごさいません、はい」

勇気をしぼって、やっと言いきった。

「では——さようなら」

軽くすかさされた形であったが、すかさされたことに腹がたつより先きに、初五郎は救われたようにほっとした。出てゆく三人を見おろして額に手をやると、年甲斐^{としがひ}もない冷汗であった。

横浜の町には不吉な噂^{うわさ}がひろがっていた。攘夷派の浪人たちが斬りこんで来て、町に火をつけ、異人と貿易商人をみなごろしにする、いや浪人だけではない、今はいもろ国全体が攘夷派だ、幕府の腰さえあやしくなった、入江のむこうには暗殺者の軍隊が浪のようにおしよせて伏兵している。町のまわりの丘の上には大砲がかくされて

いて、密偵^{みつてい}の信号のあり次第、横浜の町は砲弾の雨につつまれる、イギリス艦隊の提督キュウバアは、もしもそのような場合に立ち到ったら、列国の現在の兵力では、せいぜい外人とその家族とを軍艦に収容するわずかな時間しか抵抗できないであろうと宣言した。——芝屋初五郎の冷汗の原因は、言うまでもなく、あまりにも確からしいこの不吉な噂の中にあった。

「明日にも斬りこみがあろうというのに、なんであんな化物が泊められようか。異人なら異人らしく、居留地のホテルに行くがいい。日本人なら日本人らしく、縁起でもない、洋服なんか着ないがいい！」

初五郎は、ついこのあいだ攘夷派の浪人に斬られた異人たちのことを思いだした。

背中を裂かれ、全身に綿のように血をかむって、領事館の門前まで帰るとそのまま気を失った乗馬の負傷者、写真にとるために白いシイツの上に横たえられた紫色の死骸^{しかい}、ぶらりと下った片腕。

異人だけを斬るといふのなら、まだ話がわかるが、日本人の貿易商人を斬るといふのはどうしたわけだ。京都や大阪ではだいたいやられたという。貿易を許して、横浜移住をすすめたのは幕府ではないか。侍^{さむらい}の総元締ではないか。総元締が許したものを、侍自身が刀でおどす。なにがなんでも勝手すぎる世の中だ。二本さしているか

らといって、それがなんだ、腰に刀をさしたままお袋の腹から飛び出したわけじゃあるまいし！

去年の夏の立退き騒ぎも無茶だった。横浜の日本人は全部、商人も外人の召使も、すべて即刻立ち退けという命令。理由もなにも聞かせてくれぬ。埃っぽい神奈川街道に、長々とつづいた女子供と家財道具を山のように積みおせた馬車と荷車の行列。初五郎は、そのとき最後まで頑張つて立退きをこぼんだが、幕府の役人がやつてきて刀でおどした。刀にはかなわぬので、家財をまとめて翌朝早く発とうとしたら、その同じ役人が来て、立ち退かなくともよろしい、いや立ち退いてはならぬと言つた。なんという勝手すぎる話だと思つたが、あとで聞いたら、イギリスのキューパア提督とフランスのジョレス提督が幕府にかけ合い、立退き命令を取り消さなければ、両国の兵隊で横浜を占領し、江戸に大砲をぶちこむぞと脅したからだったそうだ。

「はてな——そうしてみると」

そこまで考えたとき、初五郎の狭い心に一筋の光がさした。そうしてみると、列国は今度もその手をやろうとしているのかもしれないぞ。幕府を脅して味をしめたイギリスは、その後も、生麦事件を口実にして、攘夷の本元である薩摩を攻めに出かけて行つた。鹿児島を焼

つたという——残っているのは長州だ。

長州は奉行所の役人の話によると、薩摩よりもつと腹の黒い攘夷の親王で、京都の朝廷をうまく抱きこみ、幕府を乗つとり、関ヶ原このかたの恨みをはらそうと、なにかしら大変な陰謀をめぐらしているという。改心した薩摩が会津と力をあわせて、長州を京都から追つぱらつたが、それでも尊王攘夷はやめない。藩に帰つて、下関に頑張り、外国船をぼんぼん撃つ。人気とりと幕府いじめのずるい術にちがいないのだが、国中の攘夷派はそれに勢いをえて盛んに斬る。外国人ばかりではない。日本人でも外国の品物を買つたというそれだけの理由で斬られたり脅されたりする。

そのために横浜の貿易はあがつたりになつた。四国の公使——イギリスとフランスとアメリカとオランダは、軍艦と兵隊を集めはじめた。陸には——急造のバラック、青い上衣、赤いズボン、輝く銃剣、まっ黒なアフリカ兵の笑い顔、そして海には——海防艦、二重甲板船、外輪単槳船、砲艦、フランス風のフリジット、どれもこれも、真白な帆を斜めにはりあげ、洋妾のように気取っている。明日にも長州征伐に出かけるのだそうだ。幕府も内々それを望んでいるという。

そうだとすると、あの洋服の化物も、何かそれと関係があるかもしれないぞと思つたので、初五郎はもう一度

門口に出てみた。すると、居留地^{*セトルランド}の方にまがる街角で、二人の外人と行き会ってなにか話しているサトウのそばに、例の二人がもじもじと立っていた。芝屋初五郎は物の怪に襲われたように首をちぢめて、帳場の奥に飛びこんだ。

アーネスト・サトウは二人の青年をつれて、居留地の煉瓦の色と明るい空気の緑の並木の中に歩きこんで行った。向うから、幕府の役人らしいのが馬にのって、供はつれず、寺院の屋根のような曲線をもち、表に漆、裏に金をぬったカブリモノを頭にのせてやってきた。

役人はサトウを見ると、ちよつと顔色を動かしようだったが、軽く馬上で会釈しただけで、さっさと行きすぎた。

（外国奉行竹内甲斐守といつか一緒にきた男だ。フランスの公使に会いに行ったのかな。……ナポレオン三世の手にのって、幕府がフランスと密約をかわしそうな気配がある、そういつてオルコック公使が心配していたが）

外交官らしく、サトウはそんなことを考えながら、馬上の役人の方を改めてふりかえった。そして、そばにいたはずの二人の青年の姿が紛失しているのを発見した。肩をゆすってサトウは五、六歩ひきかえした。オランダ商館の派手な看板の下の狭い横町から、二つのおびえた

顔が鼠のようにのぞいていた。

「逃げましたね」サトウは笑いながら英語で言った。

「すっかり自信がなくなつたとみえる」

二人は青年らしく顔を赧らめた。年上の方は何か言いかえしたい風に口を尖らせたが、サトウは手をあげて、よろしいと押しとどめ、さっさと先きに立って歩きだした。

三人は海岸通りに出て、オランダ系のアメリカ人が経営している真新しいホテルの中に入った。歌川貞秀えがくところの錦絵「横浜商館外国人夜宴之図」ほどにも原色の多い調度品。帳場にすわった支配人の鼻も、絵の中の人物ほどに曲って高く、眼の色もこぼれそうに青かった。

サトウは、まだ灯の入れぬ真鍮飾燈の下で、ホテルの主人と早口に話した。主人は無造作にうなずきながら旅客票にサインする二人の青年のポルトガル名前と黄色い顔とをちよつと見較べただけで、番号のついた部屋の鍵をわたした。裏二階の庭の見える部屋に案内されて、白い上衣を着た日本人給仕の登音が階下に消えると、サトウは急にはしやぎだした。大げさな用心深さでドアの鍵をかけてから、右手を胸にあて、芝居がかった口調の日本語でいった。

「さあ、君たちの本国へ、たぶんポルトガルへ、やつと

帰りつきましたよ。安心したでしょう」

彼はこの言葉を、ここに来る途中の沈黙の中で、しきりに組み立てていたのだ。

年下の方はただ笑っただけだった。しかし、年上の方は眉の根をさっと青くして、さっきから抑えていた怒りを吐きだすかのように叫んだ。むろん、はっきりした日本語で。

「僕らは、こわがってはいません。あなたは我々を……」

あとは吃^{ども}つて、つづかなかった。

「おお、怒るのはいいけません。……わたしは、まじめです」

サトウはあわてて自国語にかえり、まじめな口調で次のような意味をくりかえした——洋服は着ていても、日本人の眼はごまかせないらしい、当分この部屋にじっとしている方がよからう、ホテルの主人にはよろしく話しておいた、日本人の給仕には気をつけるように。

そして、親切につけ加えた。

「居留地の外には出ない方がいいでしょう。止むをえない用事で出かけるときには、公使館へ知らせてください。公使に話して、イギリスの護衛兵をつけるようにしておきますから」

第二章

波と椿^{つばき}の葉の間から元治元年七月の太陽がのぼり、半円形の小さな入江の奥に眠っている大きな蝶^{ちょう}の斑^{まだら}々な羽を鮮^{あざやか}かに照し出した。

横浜は羽をひろげた蝶の形をしていた。左の羽は日本人街——木造の手軽な家、騒音とややばげしい交通、頰骨の高い黄色い人種が腰をまげてこせこせと動いている。右の羽は居留地——切石の迫持、高い窓、木造の明るいヴェランダ、石灰をふくんだ黒煉瓦の緩かなまたは鋭い屋根の線、ひろびろした庭園、住宅と商館、商館のまわりに群れている手車と仲仕^{ナリシ}、人通りの少ないしかし歩きさえすれば世界のすべての隅^{すみ}から集まってきた人種と国民を見ることができるとかや不規則な街路。その上に高々とひるがえって、力と文化の優越を左の羽にむかつて誇らかに示威している各国公使の五彩の旗。——二つの羽のこの対照の中に、人々は元治元年の「国際都市」横浜の特性を見ることができるとかや。

当時の横浜は穴であつた。国際資本が鎖国日本を世界市場に組み入れるために、手荒な外科手術によってこの国の横腹にぶちぬいた惨めな穴、この穴を通して、ヨーロッパとアメリカの工業資本が、日本の胎内に商品の流

れをそそぎこむことに血眼ちまなこになっていた。街の治安は外国によって保たれている。海には三十隻の軍艦、陸には三千人の外国軍隊。はげしく利益を争いながらも、いざといえど砲門を同じ方向に向けることに固く一致する各国の商人と外交官。——これだけの特性がそなわっているとすれば「国際都市」という近代用語にあてはめても、時代錯誤をおかすことにはなるまい。

さて、二人の青年をホテルにおくりこんだ翌日、アーネスト・サトウは、「国際都市」横浜の右の羽を代表する人間のゆるやかな歩調とはりだされた胸とをもつて、海岸通りのひろやかな道を税関所の建物の方にあるいて行つた。サトウはそこで、昨日散歩を約束した二人の友人——パロッサ号の艦医ブウランとユライアラス号乗組の写真師フエリックス・ビイトとを見出した。二人は、道ばたの小さな木造の台の上にならべられた日本の工芸品を眺めていた。古い陶器、加工された牙と角、デザインのこまやかな漆うるしの盆、金色の象眼細工をもった青銅の器具、刀と小箱、その他形容のできない不思議ながらくたのもの——それらの中から、ブウラン医師は数枚の木版画をとりあげて、感にたえた眼つきで眺め入っていると

ころであつた。

「また、お買上げですか、ドクトル？」
サトウはたずねた。陳列台の向うに、小悪魔のように

満足した薄笑いをうかべている日本商人の顔を見て、また途方もない値段をふきかけられたなと思ひながら。
「買いましたよ」厚い眼鏡めがねの奥から、おだやかな羊のような眼をかがやかせて、初老に近い奇妙な医師は答えた。
「全くすばらしい！」

奇妙な医師——たしかにブウラン医師は、軍人と外交官と商人だけの外人仲間では奇妙な存在であつた。彼はフランス系のスイス人で、アルプスの高く自由な空気を吸つて育つた。アレネベルクで放浪時代のルイ・ナポレオンと知り合い、彼のシュトラスブルグでの失敗した挙兵に小さな一役を演じ、その後、彼に従つてパリに行つた。しかし、四十年代のどさくさに紛れて、ルイが「革命的共和主義者」の仮面をすて、ブルジョアジイとプロレタリアートの双方をたくみに踏台にして、皇帝の王冠をねらいはじめると、だまつてラテンの街の隅にひっこんで、「ゴルシカの賤民せんみん」の血はあらそえぬとルイを罵ののしつた。やがて、成功したルイのクウデターが、チエールとヴィクトル・ユウゴオを牢獄ろうごくにたたきこみ、彼自身をナポレオン三世につくりあげてしまったとき、ブウランはパリを見すててロンドンに走つた。

ロンドン滞在中のある日、ブウラン医師はある茶店のテエブルで、ユニヴァンティ・カレッジの学生の一人が、ロオド・エルジンとロオレンス・オリファントの見聞記

の表紙をたたきながら、しきりに日本についての夢を語っているのを聞いた。学生の話によると、東洋の海に浮かんだ宝の小箱のようなその島には、いつも青々とした空があり、赤い太陽が花のように照り、住民たちは、ふしぎな造園術によって、年をとるほど小さくなる植物を植えた庭をながめながら、草で作った敷物にすわり、薔薇色の唇と黒い眼とやさしく行きとどく心とをもった娘たちにとりかこまれて暮している。……

その学生が若いアーネスト・サトウであった。二年の後、いくつかの偶然的組合せが、この二人の浪漫主義者をイギリス東洋艦隊の甲板にのせて、それぞれ横浜の港までおくりとどけた。むろん船と時とは別であった。サトウは漢字を学ぶために、しばらく北京にとどまっていたので、医師よりも到着はずっとおくれた。だが、横浜で再びめぐりあつて以来、年こそちがうが、二人は仲のいい友人であった。

「サトウさん、この絵の作者はなんというのでしょうか。そこにサインがしてあるらしいが？」

サトウはさしだされた絵をみて、漫画だと思った。太い線で奇怪な女の顔が描かれてある。猫のような顔、猿のような眼、羽のようにはりだした髪、曲った唇、この国の木版画によくある俳優の誇張した表情の瞬間をうつしだした絵だとはわかるが、画面にただよっている嘲

笑的な気分はどうみても漫画だ。

「さあ、なんと読みますか。上の文字は写す、下の字は楽しむという意味だから、ビイト君の職業に関係がありそうな名前ですがね」

「そうですね。……こちらは？」

「ああ、これはハルノブ……春信です」

この方はずっとわかりやすかった。美しい女が膝をたてて、紙と竹でつくった家のまろい窓によって月をながめている。壁の上には遊女の楽器があり、床の間には花がある。まろやかな線とおだやかな色彩。——サトウはその中から抽象的な好色、童話的なエロティシズムとでもいいたいものを感じた。もう一枚の「漫画」の中にあふれている苦い激しさはどこにもなかった。

「これは美しい！」

「それが？……」プウランはサトウの顔をみて、意外だという表情をした。さっきの「漫画」を差し出して、

「美しいのはこちらです」

「漫画の中にも美がありますかね」

「いやこれは漫画ではありません。まじめな絵です」

「そうですね」

「あなたは、この国の絵を研究する気はありませんか？」

「いいえ、別に。……僕には絵はわかりません」

「いい絵をみると、眼から鱗^{うろこ}のおちたような気がしませんか？ 心が花のようにひらいたり、刃物のように鋭くなったりするような気になりませんか？」

「はあ……」

若い通訳官は、またドクトルのいつもの癖がはじまつたなと思った。プウランの船室はまるで小図書館である。船室の隅に酒瓶や人形や絃楽器^{げんぎ}をかざってある程度に風流な士官たちはざらにあるが、プウランのようにたくさんの本をもっている船乗りは、イギリス東洋艦隊の中には一人もない。親切で技術のたしかな医者だということのほかに、珍しい学者だという点で、彼は心の単純な同僚たちの信頼と尊敬を集めていた。それはいいとして、いつもはむっつりしているくせに、たとえば絵や音楽の話になると、医師は彼の書物の山の谷間から湧き出てくるらしい言葉の泉を滔々^{とうたう}と吐き出しはじめるので、油断していると聞き手はどこまで押し流されるかわからない。困ったことになったぞと思ったのでサトウはさえぎった。

「しかし……」

「ああ、しかし……」プウランは勝手にうなずいて先きをつづけた。「しかし、すべて天才ある芸術家は、彼自身の深い世界をもっていて、彼の作品を見るもののすべてを魔法の渦のように自分の世界にひきずりこむのです。

ある場合には、作者の世界は小さくて狭く、その中に入るためには、海老のようにからだを曲げ胎児のように身をちぢめなければならぬことがあります。にもかかわらず、作者の力が見るものに魔法をかけて、彼を小人^{こびと}にしてまでも、自分の世界に連れて行く。たとえば、これです。サトウ君のいう漫画です。この作者の作品だけでなく、一般にこの国の芸術の世界は狭くて小さく、奇妙に歪^{ゆが}んでさえいるが、強く私をとらえてひきずりこむ」

「よくわかりました」と、写真師のビイトが口を入れた。彼はさっきからにやにやとパイプをふかしながら、二人の話を聞いていたのである。「結局、プウランさん自身が天才ある芸術家なんです。まことに一種独特の世界を自分の中にもっていて、僕らをその中にひきずりこもうとするのだから」そう言って、土の上から写真機をとりあげて肩にかけながら、「なにしろ、僕なんか一番安全さ。昨夜もプウランさんから、絵と写真の問題でだいぶやつつけられたが、いくらやられても、僕の精神の内容はこの写真機のようにからっぽなのだから、問題は起らぬ。写真機の理論にしたがえば、世界は外にあって、内にはない。そうでしょう、ミスタ・サトウ。ところで、そろそろ出かけるとしましょうか、ドクトル・プウラン」

「行きましょう。しかし……」